

比較文化論 : 大項目別報告 : 織物・タパ加工 2500

著者	吉本 忍
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	92-98
発行年	1990-03-10
URL	http://doi.org/10.15021/00003681

織物・タバ加工 2500

吉 本 忍*

- | | |
|--------|---------|
| 1. 樹皮布 | 3. 防染技法 |
| 2. 手織機 | 4. 繊維素材 |

織物・タバ加工の大項目のうちには、樹皮布、単綜統織機（地機）、高機（踏み織機）、ろうけつ染め、緋 (ikat)、しぼり染め (plangi)、木綿、絹、芭蕉布という8項目にわたる小項目があげられている。以下では、これらの小項目を樹皮布、手織機、防染技法、繊維素材に大別しコメントする。

1. 樹 皮 布

樹皮布（2501）は、一般に人類が織物を発明する以前から存在した原始衣料と考えられており、今日においては、とりわけオセアニア地域の樹皮布がタバの名で知られている。クラスター資料では、樹皮布には87件の分布例が示されており、それらの分布例は、オセアニアのみならず、東南アジアの広範な地域にわたって格別の地域的な偏差もなく分布している。そして、両地域の樹皮布の分布件数も、オセアニアの45件に対して東南アジアが42件と拮抗しており、樹皮布が東南アジア・オセアニアにおいて、かなり普遍的な文化要素であるということがあきらかとなっている。また、樹皮布のクラスター資料に単綜統織機（2502）と高機（2503）という手織機の分布例を重ね合わせてみると、樹皮布の分布例のうちで単綜統織機と高機のいずれかと重複している件数は22件であり、その内訳は東南アジアでは4件となる。したがって、こうした状況は、一般に織物以前の布といわれる樹皮布の加工技術が、かならずしも機織り技術を持たない民族に占有のものではないことを示すものとして注目される。

* 国立民族学博物館第2研究部

2. 手 織 機

手織機としては、単綜統織機（2502）と高機（2503）の2項目があるが、これらについては、若干の補足説明と訂正を要する。まず、単綜統織機とは、基本的に織物の多様な組織のうちで、もっとも単純な平織組織を織るために使用される綜統の数が1枚で構成されている手織機であるが、クラスター資料の文化要素として取りあげられた単綜統織機には、サブタイトルとして「地機」の名称が掲げられているところから、前記のような単綜統織機のうち、とくに綜統の種類が輪状綜統 [吉本 1987: 345-347] で、腰当を備え、機にかけられた経糸の一方が腰当を介して織り手の腰によって保持されるタイプの手織機、すなわち、わが国で一般に、地機をはじめとして、いざり機、腰機、後帯機など、さまざまな名称でよばれている手織機を意味するものと考えられる。一方、高機とは、同様の平織組織を織るために使用される番目綜統 [吉本 1987: 348] の数が2枚で構成されており、織り手が個々の綜統に繋がれている踏み木を足で踏み替えながら、2枚の綜統を交互に上下させる機構を備えた手織機である。また、以上のような単綜統織機と高機に対応する英語名としては、クラスター資料では、当初より horizontal loom と vertical loom の名称があてられてきた。しかしながら、単綜統織機はかならずしも horizontal loom に限定されるものではなく、vertical loom のうちにも存在する。したがって、単綜統織機に対応する英語名としては、single heddle loom が適切であり、地機、いざり機、腰機、後帯機などの名でよばれる手織機に限定した場合には、back tension loom が妥当な名称と考えられる。また、高機に対して horizontal loom や vertical loom といった名称をあてることは一般的ではなく、あえて、そのいずれかということであれば horizontal loom の範疇に属するが、もっとも妥当な英語名としては、サブタイトルにあげられている「踏み織機」に対応する treadle loom があげられる。したがって、以上のような日本語と英語の文化要素名に問題点がある以上、単綜統織機と高機に関するクラスター資料の作成結果については、一部に誤りがある可能性も考えられるが、以下では単綜統織機は back tension loom という英語名に対応する手織機として、また、高機は踏み織機、すなわち treadle loom として解釈しコメントする。

単綜統織機と高機はともに、東南アジア・オセアニアにおける代表的な手織機といえるものである。しかしながら、これらの地域には、若干ではあるが単綜統織機と高機のほかにも型式を異にする手織機があるところから、単綜統織機と高機の分布のみによって織物の加工技術、すなわち、機織り技術の有無を厳密に把握することは不可

能であり、ここでは、単綜統織機と高機をもちいた機織り技術の分布についてしか言及することができない。

単綜統織機は、東南アジア・オセアニア全域では75件の分布例が示されている。その内訳は、マダガスカルをふくむ東南アジアでは65件、オセアニアでは10件となっており、東南アジアでは、広範な地域にわたってかなり普遍的な分布がみられるのに対して、オセアニアではおもにカロリン諸島からソロモン諸島にかけての局地的な分布が特徴となっている。なお、単綜統織機は、経糸の保持方法や整経方式の違いによって、いくつかの型式に分類することができる。ただし、現状のクラスター資料からは、そうした型式分類は不可能であるが、それらのうちで、もっとも古いと考えられる型式は経糸を織り手の腰と両足で保持するものであり[吉本 1987: 337-338]、その他の諸型式は、いずれも、その発展型式と考えられる。したがって、少なくとも東南アジア・オセアニアにおける単綜統織機、および、単綜統織機をもちいた機織り技術は文化的に連続性があり、個々の型式は発展段階を異にしながら今日に至っているものと推察される。また、前記のもっとも古い型式と考えられる単綜統織機は海南島の Li, ベトナムの Stieng, 台湾の Atayal, Paiwan, Rukai, ミクロネシアの Fais 島民, イリアン・ジャヤの Sobei などの諸民族のもとで使用されている。さらに、それらと同様の単綜統織機の形態は雲南省石寨山遺跡出土の貯貝器に付属する機織り女像[馮 1961: 479]のうちにも認められる。したがって、これらの諸点を考えあわせるならば、東南アジア・オセアニアの単綜統織機は共通の起源を有し、中国西南部やベトナム北部あたりを源流として、民族移動、あるいはその後の比較的早い時期に、東南アジアの各地、さらには、オセアニアへと伝播していった可能性がきわめて大きいと考えられる。

一方、高機は、もっとも生産性の高い機構を備えた手織機である。したがって、今日では世界の広範な国々でひろく使用されているが、クラスター資料では、東南アジア・オセアニアにおける高機の分布例は、単綜統織機の場合にくらべると20件とかなり少なく、それらのすべては東南アジアに集中している。また、それらのうち8件(Karen, Lisu, 貴州 Miao, Pulang, Bugis, Makassarese, Balinese, Sasak)は、先の単綜統織機の分布例とも重複している。したがって、これらについては、単綜統織機と高機が併存しているなかで、手織機の型式が単綜統織機から高機へと移行してきたというわが国と同様の状況がうかがわれる。なお、高機の分布例のうちにある Javanese と Sundanese は、単綜統織機の分布例には認められないが、筆者の現地調査では、これらの民族のもとでも単綜統織機が使用されており、先の8件と同様に

単綜統織機と高機が併存していることがあきらかとなっている。さらに、高機の分布例のうち Manggarai については、現地調査では高機ではなく単綜統織機が確認されているのみであり、Manggarai は高機の分布例から抹消して単綜統織機の分布例に移されるべきものと考えられる。したがって、インドネシアにおいては、高機と単綜統織機の分布例のうち高機のみが分布している民族としては Minangkabau があげられるにとどまり、その他の民族のもとで使用されている高機は近世以降に導入されていることから、高機は東南アジアでは島嶼部よりも大陸部において先行して使用されてきた可能性が高いものと推察される。

3. 防染技法

織られた布に模様をあらわすための染織技法はさまざまであるが、織物・タパ加工のうちあげられているろうけつ染め (2504)、紺 (2505)、しぼり染め (2506) は、いずれも防染技法として知られているものばかりである。これらの防染技法は世界の広範な地域において認められるものの、とりわけインドネシアをはじめとする東南アジアの防染技法は、今日、世界的に有名であり、本来インドネシア語である batik, ikat, plangi は、それぞれ、ろうけつ染め、紺、絞りを意味する世界共通の名称としてもちいられるようになってきている。したがって、インドネシア、あるいは、東南アジアが、今日、世界の防染技法の中心的な地域のひとつであることは間違いのないところであり、クラスター資料でも、これらの防染技法が東南アジア・オセアニア地域では東南アジアのみに偏在していることがあきらかとなっている。

ろうけつ染めには12件の分布例が示されており、これらは東南アジアの大陸部と島嶼部のうちインドネシアに集中している。このうち、インドネシアのジャワ島を中心としておこなわれてきたろうけつ染めについては、これまでにインドからの影響によるものとする説があるが、中国西南部や東南アジア大陸部との関連や独自の発生という可能性も考えられ、その起源についてはいまだあきらかでない。なお、インドネシアでの分布例のうちには、Balinese と Sumbanese があがっているが、Balinese については、観光工芸としてジャワ島の技術が最近になって導入されたものであり、Sumbanese についてはクラスター資料作成に使用した原資料の誤り、あるいは、原資料判読上の誤解とみられる。また、クラスター資料には欠落しているが、インドネシアでは Eastern Toradja、もしくは、Southern Toradja においてもろうけつ染めがおこなわれており、このことは、インドネシアにおけるろうけつ染めがジャワ文化

圏以外においても分布している例として注目されるべきである。

紺については、東南アジアに14件の分布例が示されているにすぎないが、実際には、東南アジアの大陸部、島嶼部ともに、さらに多くの民族のもとでおこなわれており、とりわけインドネシアでは広範な地域にわたってかなりの普遍的な分布が認められる。なお、紺には、模様を構成している糸の種類によって、経紺、緯紺、経緯紺の3種類の技法がある。このうちもっとも高度な製作技術を必要とする経緯紺については、Balinese のうちの特定の集団のもとでのみおこなわれてきたものであるが、技術的にもっとも平易な経紺と、製作難度が経紺と経緯紺の中間にあたる緯紺については、織物・タパ加工のうちに含まれる他の小項目との関連において一般的につきのような特徴を指摘することができる。すなわち、経紺は糸の繊維素材が木綿、糸芭蕉などの植物繊維であり、機織りに使用される手織機が単綜統織機で、その整経方式が輪状整経、または、擬似輪状整経である場合が一般的である。

一方、緯紺は糸の繊維素材が絹であり、機織りに使用される手織機が単綜統織機、または、高機で、その整経方式が平整経であるという場合が一般的である。また、このほかにも、東南アジアにおける緯紺の分布は、歴史的にヒンズー教や仏教を受容した民族のもとに顕著に認められるという傾向がみられ、緯紺と、それにとまなう複合的な染織文化の成立には、インドからの文化的影響が重要な役割を果たした可能性が大である。

しぼり染めについては6件の分布例が示されており、それらはいずれも東南アジア島嶼部に集中しているが、この地域には、さらに Coastal Malay, Southern Toradja, Sasak, Tinggian にも分布例が認められる。また、ラーセン (Larsen, J.L.) によれば、Mon のほかにカンボジアでもしぼり染めがおこなわれており [LARSEN 1976: 28]、しぼり染めも紺ほどではないものの、ろうけつ染めとほぼ同様に東南アジアの広範な地域に散発的な分布が認められる。なお、以上のようなしぼり染めの分布に何らかの連続性があるか否かということについては今のところ明確ではないが、相互の関連性の有無を考えるためには、しぼり染めのうちにある巻き締めしぼり、縫い締め絞り、板締めしぼりという異なった技法ごとの分布例を考慮すべきであろうと思われる。

4. 繊維素材

繊維素材としては、木綿 (2507)、絹 (2508)、芭蕉布 (2509) の3項目があり、木綿が85件、絹が27件、糸芭蕉が11件の分布例が示されている。これらのうち、木綿と

絹のクラスター資料作成時の判読に関しては、各研究分担者によって、織物を織るために使用される木綿糸や絹糸の製作技術の有無について判読した場合と、織物の製作にさいしての木綿糸や絹糸の使用の有無について判読した場合があったようであるが、ここではクラスター資料の作成結果は、糸の製作技術よりも分布例が多いとみられる木綿と絹という糸として使用されてきた繊維素材の有無に関する分布としてコメントする。また、こうした木綿や絹の文化項目との整合性をはかるために、芭蕉布の分布例についても、便宜的に芭蕉布を織るための繊維素材として使用されてきた糸芭蕉の有無をあらわしたものとして捉えることとする。

芭蕉布は、木綿や絹にくらべて分布件数が少ないが、その特徴としては、大半の分布例がオセアニアに集中していることがあげられる。なお、東南アジアの分布例としては、わずかに Yami の例があげられているにすぎないが、そのほかにも Bagobo や Sangihe-Talaud 諸島民をはじめとするフィリピンやインドネシアなどのオセアニアに隣接する地域にも多くの分布例がある。また、糸芭蕉は、織物の繊維素材として歴史的に短繊維である木綿や長繊維である絹に先行して使用されてきた準長繊維のひとつであるが、かりに糸芭蕉(芭蕉布)にかわる包括的な文化項目として準長繊維があげられていたならば、その分布は東南アジア・オセアニアの大多数の民族のもとで認められたはずである。したがって、その場合には繊維素材や織物加工に関して、より有効な比較分析が可能になったであろうと惜まれる。

木綿は東南アジアでは80件、オセアニアでは5件の分布例が示されている。そのうち、東南アジアの分布例は、大陸部と島嶼部の広範な地域にわたっており、とりたてて地域的な偏差は認められない。一方、オセアニアの分布例は、東南アジアに隣接するミクロネシアのカロリン諸島やニューギニアの一部に集中しており、それらが、東南アジア島嶼部からの影響によるものであることが示唆される。なお、木綿の分布件数は実際には、さらに増加するものとみられる。おそらく、その分布の大半は、先へのべた単綜統織機や準長繊維の分布と重複するものと予測され、現状の木綿と単綜統織機の分布例でも重複件数は50件にのぼっている。また、東南アジアにおける木綿の分布の多くは、木綿の栽培、紡糸技術とも重なるものと推察されるが、オセアニアでは、そうした事実は確認されておらず、現状の5件の分布例のいずれについても、すべて近年において外部からもたらされた木綿糸の使用を意味するものでしかない。

絹の27件の分布例は、すべて東南アジアに集中している。また、Pai と Acheh をのぞく25件は木綿の分布例とも重複しており、Acheh についても実際には木綿の使用例が確認されていることから、東南アジアでは、木綿の使用民族の一部に絹が伝わ

っていたことが想定される。絹の起源については、周知のとおり中国であるが、東南アジアへの絹の伝播は、先の緯紵に関連するインド文化の影響とという可能性を考慮するならば、中国ルートのみならずインドからの伝播の可能性も考えられるが、これらの点については、東南アジアの染織文化と大文明の関わりについて、今後、詳細に検討すべき問題であろうとみられる。なお、クラスター資料では、絹の東限はスラウェシ島やバリ島となっているが、Sasak, Sumbanese, Savunese, Rotinese などで絹の使用例が確認されているところから、絹の東限は、さらに東に展開する。ただし、これらの民族のうち Sumbanese, Savunese, Rotinese のもとで絹が使用されてきたことは、きわめて稀であり、その使用も今世紀前半に始まったものと考えられる。